

「核兵器は必要悪ではなく絶対悪である。」この言葉は、87歳の被爆者「サーロー節子さん」が今年のノーベル平和賞授与式で講演した時のものです。被爆以来70年以上を核兵器の完全廃絶のために努力を続けてきた節子さんはさらに続けて「私たちは、被害者であることに甘んじてられません。世界が大爆発をして終わることも、緩慢に毒に侵されていくことも受け入れません。と言われます。そして、ご自分が壊れた建物から這い出て、その目を見た地獄にもまさる光景や被爆体験、身近な人や多くの同級生の死についても話されました。何者か判別もできない溶けた肉の塊に変わってしまい、かすれた声で水を求め続けていた4歳の甥が、息を引き取られた話は心に残ります。こうした証言をしてきたにもかかわらず、広島と長崎の残虐行為を戦争犯罪と認めない人たちがいます。彼らは、これは「正義の戦争」を終わらせた「良い爆弾」だったというプロパガンダを受け入れています。この神話こそが、今日まで続く悲惨な核軍備競争を導いているのです。と断言されます。

核武装国の政府、そして「核の傘」なるものの下で共犯者になっている国々の政府の行動が、人類を危機にさらしている暴力システムに欠かせない一部」になっていると厳しく批判しています。これ

は、我が国の権力者にこそ聞かせたい言葉です。岡山市民を代表して、国に物申すことは我々議会が果たすべき責任です。

ましてや「真の恒久平和を実現することは、戦災で多くの尊い人命を失い、街を焦土と化した岡山市民のみならず、人類共通の念願である。しかるに、核軍備の拡張は、世界の平和と安全、人類の生存に深刻な脅威をもたらしている。我が国は世界唯一の核被爆国として、核兵器の廃絶を世界の人々に訴え、この地球上に広島、長崎の惨禍を再び繰り返させてはならない。岡山市民は、日本国憲法の恒久平和の理念に基づき、すべての国のあらゆる核兵器が完全に廃絶されることを願い、平和で幸せな岡山市を築くため、不断の努力を誓」、<sup>岡山市</sup>うという平和都市宣言を<sup>5.22日2月</sup>議会で議決していることを忘れてはならず、この陳情 <sup>29</sup>号は採択をされなければならない。